

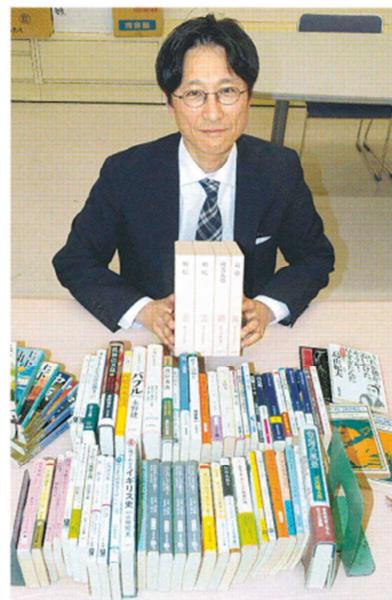
## 積まれる訳 書店員分析

西沢書店（福島市）の取締役、古川博さん（52）は、書店員生活が四半世紀を超す。その本のプロに、積ん読の私的「傾向と対策」を聞いた。

古川さんの現況は「本を積み過ぎて部屋に全部は置けず、物置に入れた。それでは（本を探そうとしても）発見できない」。重症の様子で「なので、ここ数年の（積ん読中の）本を持つてきました」と本の山を指す。山の本は①全く読めていない②少し読んでそのまま

③読んだかどうか忘れた④持っているのを忘れ、また買った一の4種類。山ができる要因は、本の性格も関係し、古川さんの場合①古典＝急ぎはしないので購入後、安心してしまった②シリーズ＝読みたくて買うが（巻数が多く）なかなか読み出せない③例外＝そもそも、どうして購入したのかが分からない」と言う。

具体的には①は同じ新書を2冊買った「莊子」。②は浅田次郎の文庫版「中原がない」とか。



「積ん読している本の多くは、購入した動機を一冊一冊覚えている。いつかは読むぞと思っている。いつかは読むぞと思うんです」と話す古川さん

福島民友新聞掲載

記事から知り得たこと

---



---



---



---

疑問に思ったこと、調べてみたいこと

---



---



---



---

調べてわかったこと、考えたこと（330字程度）

---



---



---



---

3人の方の本への思い、それぞれに考えさせられますね。

あなたは「何読」派ですか？

